

# 先人たちの足跡

— 遺跡から見た府中 —



先人たちの足跡 — 遺跡から見た府中 —

発行日 平成21年3月31日

編集・発行 府中市教育委員会

〒726-0003 広島県府中市元町1-5

印刷所 有限会社コトブキ印刷

〒726-0013 広島県府中市高木町840-2

府中市教育委員会

## 目 次

1 国府以前の府中	
日本のがけぼの	1
上下屏風洞洞窟遺跡	1
米作りの始まり	2
伊豆迫山遺跡	2
古墳の出現	3
山の神古墳群	3
南山古墳	4
2 国府時代の府中	
古墳の終焉と備後国の誕生	5
備後国府の成立前夜	5
律令制度の確立	6
備後国府跡とその調査	7
常城	10
前原遺跡と古代山陽道	10
青目寺跡	12
骨蔵器	14
国府の衰退	15
武士の時代	15
3 国府以後の府中	
南北朝時代の動乱	16
有福城と青目寺	16
八ツ尾城と守護山名氏	17
中世の石造物	18
上下代官所と石州街道	19
上下代官所跡の発掘調査	19
洞仙焼	21
府中市遺跡地図	22
府中市街地遺跡地図	25
遺跡一覧	26
関連年表	
表紙の題字は、神田知道の揮毫による	
表紙の写真は（表）ツジ遺跡（元町）出土奈良三彩	
（裏）寺山第1号古墳（栗柄町）出土銅鏡	
（背景）府中市街地空中写真	
表紙デザインは、小田恭子（第一中学校）の助言による	

## 1 国府以前の府中

### 日本のがけぼの

日本列島に人類が暮らし始めたのは、今からおよそ3万年前と考えられています。そのころの気候は寒冷で、海面が現在よりも低く、日本列島は大陸と陸続きでマンモスやナウマンゾウなど大型の動物がいました。人々は、岩陰や洞窟を住みかに利用して、移動しながら動物を獲り、木の実などを拾い集めて食料にしていました。動物をしとめたり、処理したりするためには、自然にある石を打ち割って形を整えた道具を使用していました。これを「打製石器」といい、使用していた時代を「旧石器時代(岩宿時代)」と呼んでいます。

1万数千年前頃には、気候が温暖となり、海面が上昇して日本列島は大陸から切り離されました。温暖化に伴って、シカやウサギなど中・小型の動物が増加し、魚介類・木の実などが豊富となったことで、一か所にとどまって「定住」生活ができるようになりました。その様子は、当時のゴミ捨て場である「貝塚」からうかがうことができます。人々は、土をこねて焼いた器をつくり、煮炊きや貯蔵に用いました。土器には、表面に縄を用いた文様がつけられたことから「縄文土器」といい、そこからこの時代を「縄文時代」と呼んでいます。人々は、地面に穴を掘り、柱を立てて、草や土で屋根を葺いた「竪穴住居」に住んでいました。住居の中央にある炉では、火を焚いて暖をとり、調理もしていました。その周りでは、弓矢につかう石の矢尻など狩りの道具をつくったり、植物の繊維で編み物を編んだりしていました。

### 上下屏風洞洞窟遺跡

#### －縄文時代の洞窟遺跡－

広島県北東部の石灰岩地帯には、帝釈川の渓谷を中心とした約20km四方の範囲に、50か所以上の岩陰・洞窟遺跡が存在し、帝釈峡遺跡群として全国的に知られています。

上下屏風洞洞窟遺跡（上下町小堀）もその一つです。この洞窟は、上下川との標高差20～30mの位置にあり、公園の整備工事に伴って人骨が出土したことから、入口付近で試掘調査が行われました。その結果、縄文時代前期（約7000～5000年前頃）と後期（約4000～3000年前頃）の土器が出土し、当時の人々が自然にある洞窟を住まいとして生活していたことがわかりました。

また、この遺跡から東南約1.5kmにある行年遺跡（上下町階見）からは、押型文という文様のついた土器が出土しています。縄文時代早期（約9000～7000年前頃）のもので、現在のところ市内で最古の「人の営み」の痕跡といえます。



上下屏風洞洞窟遺跡  
[洞窟入口は幅1.6m、高さ1.1m]

## 米作りの始まり

縄文時代の終わり頃になると、米作りが大陸から伝わり、鉄や青銅などの金属も日本列島へ入ってきました。米作りは九州から東北まで伝わり、人々の生活は、狩猟・採集中心の不安定なものから農耕による定住へと変化しました。当初は低湿地を利用してましたが、後には用水を引き水田を拡大していました。「石包丁」で刈り取った稻は「高床倉庫」に貯蔵され、「弥生土器」という素焼きの器で煮炊きをし、鉄からは農工具などの実用品をつくり、青銅は「銅鐸」など祭りの道具に利用されました。この時代を「弥生時代」と呼んでいます。

米作りを始めてから人々の生活は安定し、人口が増加することで「ムラ」ができました。やがて、ムラのなかには貧富の差や身分の違いが生まれ、ムラ同士が争いながら「クニ」という大きな集まりになったと考えられています。そして、クニをまとめる力をもったものが王となりました。そのころの日本列島には百以上のクニがあり、そのなかで多くのクニを従えて強大な力をもつ「邪馬台国」では、「卑弥呼」という女王が占いなどの呪術によって人々を治めていました。卑弥呼は中国(魏)まで使いを送り、「親魏倭王」の印や鏡をもらいましたが、死後に争いがおこり、その後「壹与」という女王が治めました。

### 伊豆迫山遺跡　－弥生から古墳の住居と墓－

伊豆迫山遺跡(広谷町)は、市街地の東側丘陵に立地する遺跡です。平成8年(1996)と平成12年(2000)の発掘調査で、弥生時代中・後期と古墳時代中期の集落、弥生時代後期から古墳時代の初め頃までの集団墓などが明らかになりました。

集落は、南向きの斜面に営まれ、竪穴住居が数棟見つかっています。今から約1900年前頃と考えられます。住居の周辺からは、日常に使用していた土器のほか、「分銅形土製品」が多数出土しました。分銅形土製品は、瀬戸内海地域を中心に見られるもので、お守りやムラのまつりに使用されていたと考えられています。

集団墓は、集落の斜面上側にありました。墓の数は約100基で、今から約1800～1700年前頃と考えられます。墓の中には、ガラス玉や勾玉・管玉が副葬され、遺体の人骨の一部が残っていました。周辺では、門田A遺跡・山の神遺跡などの墓地が丘陵一帯で見つかっており、見晴らしの良い山の上に墓地がつくられていることがわかります。



伊豆迫山遺跡の竪穴住居



分銅形土製品  
〔秤の分銅に似ています〕

## 古墳の出現

弥生時代の終わり頃から、各地では大きな土盛り(墳丘)墓がつくられるようになり、その地方の王の墓と考えられています。墓はその後巨大化し、「竪穴式石室」に遺体を葬るとともに多量の銅鏡、鉄製の武器や農工具などが副葬されています。この墓を「古墳」といい、つくられた時代を「古墳時代」と呼んでいます。古墳は、方形と円形を組み合わせたかたちから「前方後円墳」と呼ばれ、ヤマト(現在の奈良盆地周辺)の王が中心となって、日本各地の有力なクニが政治的に結びついて出現したものと考えられています。この連合を「ヤマト政権」といい、ヤマトの王は「大王」と呼ばれ、その力は東北から南九州まで及びました。大王のなかには、中国に使いを送り「將軍」の称号をうけるものもいました。古墳時代後期(約1500年前頃)になると、日本各地で小さな古墳の密集した「群集墳」が出現します。これらの古墳では、「横穴式石室」に追葬が行われており、家族を同じ墓に続けて埋葬していると考えられています。

### 山の神古墳群　－古墳に葬られた家族－

古墳時代の前半期(約1700～1600年前頃)、備後地方南部では「箱式石棺」と呼ばれる墓が盛んにつくられています。石棺という形式と花崗岩の地山に掘り込んだつくり方のため、人骨が残りやすいのが特徴です。出土した人骨を分析することで、当時の社会状況などさまざまなこと、特に家族のあり方がわかってきてています。

山の神第1号古墳(元町)では、3つの箱式石棺が見つかり、第1主体には男性人骨1体、第2主体には男女の成人人骨各1体、第3主体には幼小児の歯が残っていました。人骨の形質から、第1主体の男性と第2主体の男性は血縁関係にあることがわかりました。その後調査された山の神第2～4号古墳で出土した歯の形質から、被葬者の間には血縁関係が推定されています。山の神古墳群は、ムラの首長(地域のリーダー)とその家族が葬られた墓であることが明らかになりました。

箱式石棺の中に複数の遺体が葬られている例は数多くあり、府中市内でも山の神第1号古墳のほか、同第2号古墳、用土町の城山第1号古墳などがあります。埋葬の仕方をみると、遺体の並べ方には、頭を同じ方向に向けたものと頭と足を逆さまに向けたものがあります。性別をみると、男性と女性を合葬する場合が多く、従来は夫婦と考えられていましたが、最近の研究から兄妹や姉弟など血縁関係にあることがわかつてきました。複数の遺体を葬る場合は、前の遺体を整理して次の遺体を葬っており、追葬が行なわれていることもわかりました。山の神第1号古墳では、先に葬られた人骨の頭部が赤く塗られていますが、これは遺体が白骨化した段階で顔料が塗られたことを示しています。このように埋葬された



山の神第1号古墳  
〔石棺内に合葬された人骨〕

状況から、当時の風習や人々の死者に対する感覚がうかがえます。

弥生時代には、村人のほとんどは集団墓地に葬られていましたが、やがて首長やその家族などの限られた人が、特に区画・土盛りされた墓に葬られるようになりました。

古墳時代には、首長など限られた人のみが大型の古墳を築造しますが、古墳時代も終わり頃になると、小規模な古墳が全国的に増えています。これらの古墳にはムラの有力者が葬られており、古墳をつくる階層が広まっていることを示しています。

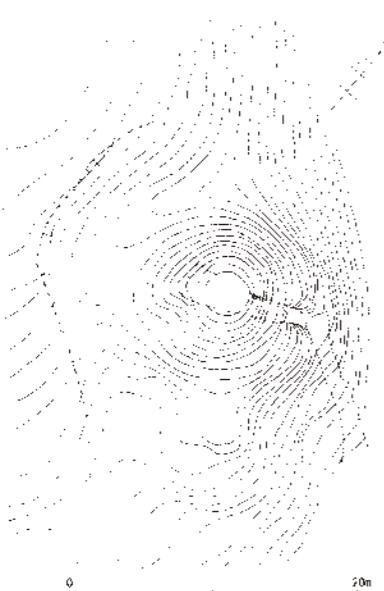
奈良時代以降には、墓の発見例が減っていますが、身分関係を厳格に維持する律令国家の成立によって、葬られる人の階層が再び限られるようになったと考えられます。また、発見される墓も家族の墓ではなく、個人の墓が中心で火葬が行われている例もあります。

中世は、一部の人の墓しか残っていませんが、江戸時代の後半になると、墓石を持った墓がつくられはじめます。そして、現在のようにみんなが墓に葬られる時代へとつながっていきます。

### 南山古墳　—地方の前方後円墳—

南山(第1号)古墳は、上下町水永と斗升町との境の峠近くにあります。広島県史跡に指定されている横穴式石室を前方後円墳で、平成3年(1991)に石室内の発掘調査と墳丘の測量調査が行われています。その成果によると、墳丘の全長約22.5m、後円部の墳丘直径約14.5m、前方部の墳丘長さ約8.5m、後円部墳頂と前方部墳頂の標高差2.5~3mで、墳丘の形態は前方部が短小な後円部との標高差が大きなタイプです。石室規模は、長さ8.3m、奥壁の幅2.51m、奥壁の高さ2.2mで、石室内には、立柱状の石が突出して玄室と羨道を区別しています。遺物は7世紀前半の須恵器が出土していますが、石室の石材利用状況や庄原市唐櫃古墳に類似していることなどから、古墳は6世紀の終わり頃につくられたと考えられます。

備後地方の古墳は、分布状況から大まかに南部地域と北部地域に分けられます。立柱状の石が突出する形態の古墳は、北部地域中心に分布していることから、南山古墳は北部に属していますが、位置はその南端にあたります。



南山古墳の墳丘  
[等高線は25cm間隔]



南山古墳の石室内部

## 2 国府時代の府中

### 古墳の終焉と備後国誕生

7世紀になると前方後円墳は造られなくなり、それに代るように仏教寺院が建てられるようになります。このころ、中国や朝鮮半島の制度を手本にして、天皇を中心とする体制づくりが進められました。飛鳥地方が政治の中心になったことから、この時代を飛鳥時代といいます。

『日本書紀』天武天皇2年(673)の条に、「備後の国司が亀石郡(現在の神石郡)で捕獲された白い雉を都に献上した」という記述があります。「備後」の国が、記録に現れる最初の事例です。府中市を含む広島県東部地域から岡山県にかけては、古来「吉備」と呼ばれていましたが、8世紀には備前・備中・備後・美作の4つの国(現在の県に相当)に再編成されるとともに、地方の行政制度が整えられてきました。国と国の線引きがどういう原理で行なわれたかよくわかつていませんが、政治的な領域、文化的な結びつきや地理的なまとまりなどが考えられます。

### 備後国府の成立前夜

古墳時代の府中周辺では、前方後円墳などの広範囲を統括するような「首長墓」(地域のリーダーの墓)は見当たりません。しかし、7世紀後半を過ぎると、畿内地方などに多く見られる1つの墳丘に2つの石室を持つ打堀山B第2号古墳や、畿内地方以外ではほとんど出土例がない「鎧座金具」(棺に取り付けた環状の金具)を出土した東楓木山A第4号古墳など、特徴的な古墳が出現します。さらに、「藤原宮式」瓦を出土する伝吉田寺が建立され、亀ヶ岳周辺には古代山城である常城も築かれます。国府が設置される前段階には、地域に急激な変化が認められ、勢力を増している状況がうかがえます。

時代は少し下りますが、平城京跡から出土した奈良時代初期の「木簡」の中に、「備後国葦田郡葦田里／氷高親王宮春税五斗」と記された荷札があります。これは、葦田里(現在の府中市街地)辺りが氷高親王(後の元正天皇)の封戸(役人や貴族などへの支給地)であったことを示しています。このような関係が以前から続いていると考えると、府中における急激な変化が見えてくるのではないかでしょうか。中央との関係が深い理由としては、府中が備後における南北の文化の接点に位置することや、交通路の結節点であったことが関係していたと思われます。



打堀山B第2号古墳〔石室が2つ並ぶ〕



伝吉田寺跡出土瓦〔男性が描かれている〕

## 律令制度の確立

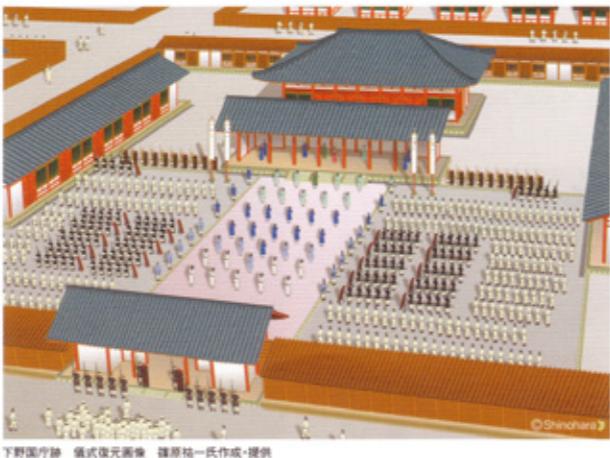
和銅3年(710)、奈良の平城京に都が移されます。当時の日本は、中国の唐に倣った「律令」制度(律:刑法、令:行政組織や税などの規定)により国の仕組みが整い、地方は60余りの「国」、その下に「郡」、さらに下には「里」という行政区が設けられました。朝廷の権威を背景に、都と各地域の間に命令や情報を伝えたり、各地からの税を集めたり、徵税のための戸籍づくりをする役所が設置され、全国の隅々まで支配するための体制が整えられました。

国府とは、国という行政区を治めるための役所が置かれた地のことです、国府には「国衙」と呼ばれる役所の建物群が形成されて、そのなかで最も中核的な施設を「政庁」(国府)といいます。政庁は、門をもつた築地壠や堀などの区画施設で周りを囲まれ、内側には正殿・脇殿・前殿・後殿などの掘立柱建物や瓦葺礎石建物が中庭(集会・儀式を行う重要な空間)を中心に規則的に配置されていました。全国の国府跡の中には、発掘調査などによって、政庁が見つかっているものがいくつかあります。建物の規模については多少の違いがみられるが、配置はどの国でもほぼ共通しています。政庁の周辺にはさまざまな事務を行う庁舎、国府で必要なものをつくるための工房、物資を保管する倉庫、国府で働く役人が住む官舎、食材・食事を用意する調理場などが配置されていました。

国府には、都から「国司」と呼ばれる役人が派遣されました。国の長官である「守」、長官の補佐をする「介」、記録や文書の審査・作成に携わる「掾」・「目」(これらを「四等官」といいます。)と、彼らを支える「史生」がいました。各国の面積や人口などの基準(大国・上国・中国・下国と定められていました。)に応じて、派遣される国司の位階や人数が規定されており、上国であった備後国(大國)の長官である守には、従五位下の位をもつ貴族がひとり任命されました。国司の仕事は、行政・司法・警察・軍事など広範囲にわたり、国司の下で約600人の職員が働いていました。また、国内の農民には、稻や農作物・特産品などを納める税以外に、物資の運搬や兵役や土木工事・その他の雑務といった労働による税の負担が定められており、国府で労働に従事したり、都で天皇の警備をしたりする人々もいました。国府は、奈良時代から平安時代の約500年もの間、地域の政治・経済・文化の中心となり、情報・物資が交流して多くの人々が関わりをもつ場所であったのです。



復元した国府時代の衣装



下野国府復原図

## 備後国府跡とその調査

平安時代中頃に編集された『倭名類聚抄』には、「備後国の中には14の郡、62の郷、3つの駅家が置かれ、国府は芦田郡に置かれていた」と記録されています。「備後国府」は「備後国」を治める役所が置かれた地ということですが、政府など国府の中核施設の正確な位置については記されていませんでした。

昭和57年(1982)から、備後国府の場所を明らかにするために発掘調査が開始され、府中市市街地の各地で試掘調査が実施されました。その結果、出口町から府中町・元町・鶴飼町までの芦田川北岸の山寄せ一帯に、国府に関連する遺構や遺物が集中して発見されていることがわかりました。この成果を引き継いで、現在まで元町地区を中心に調査が進められ、国府に関連する遺跡として、「ツジ遺跡」・「元町東遺跡」・「金龍寺東遺跡」・「ドウジョウ遺跡」など重要な遺跡が確認されています。

### ツジ遺跡

ツジ遺跡は、元町地区を南北に流れる砂川(音無川)の東側に広がる、奈良時代から平安時代にかけての遺跡です。

発掘調査の結果、多くの掘立柱建物跡のほか、井戸・溝・柵の跡が集中して見つかっています。建物跡には、柱穴の大きさが1m以上のものもあります。建物や溝・柵は、およそ数百m四方の広い範囲内に方位を合わせて計画的に配置され、同じ場所で数度の建替えが行われています。

遺物としては、須恵器・土師器を中心とした日用雑器のほかに、「奈良三彩」の蓋付小壺が出土しています。奈良三彩は、上薬で鮮やかな三色(緑・黄・白)に焼かれた奈良時代の陶器です。この小壺の中には、ガラス製の小玉が54個納められており、当時の建物などを建築する前に行う地鎮の儀式に伴い埋められたものだと考えられている、全国的に非常に希少な例です。他にも、「厨」(食事の用意や調理をする場所)という文字が墨で書かれていた「墨書土器」や円面硯・風字硯などの陶製の硯、役人が着用したベルトに付けられていた「石帶」(石製の飾り)、当時の高級品である「緑釉陶器」などがあります。緑釉陶器は、東海地方や京都府・滋賀県などで焼かれた緑色の上薬がかかった陶器で、その出土量は一遺跡としては広島県内で最多を誇ります。



ツジ遺跡の建物群 [9901丁]



奈良三彩



「厨」墨書土器



「養」刻土器

## 元町東遺跡

元町東遺跡は、元町地区のツジ遺跡の東側に、奈良時代から平安時代にかけて広がっている遺跡です。

発掘調査の結果、奈良時代に掘られた最長で約45mある溝が2本見つかり、調査範囲の外に続く広い範囲に及ぶものと思われます。この溝は、周辺の建物群の配置や方向の目安とするため、設計の際に掘られた溝と考えられます。平安時代の終わり頃には、この辺りはゴミ捨て場となっていたようで、大量の土師器が出土しています。そのなかには、とうみょうざら（夜間の照明として使われていた小皿）が含まれていました。

その他の遺物としては、ツジ遺跡と同様に硯や帶の飾り具（「巡方」）、緑釉陶器などがあり、国府に関係する遺物が多く出土しています。

## 金龍寺東遺跡

金龍寺東遺跡は、元町地区の西端に広がる奈良時代から平安時代にかけての遺跡です。

平成3年（1991）からの断続的な調査で、礎石建物跡や大型の掘立柱建物跡などが集中して見つかっています。礎石建物は石積みの基壇を持ち、掘立柱建物には地面から直に板壁を巡らせたものもありました。また、庭園の池と見られる遺構も見つかっています。

遺物は、鳥の姿が刻まれた鬼瓦などを含む大量の瓦のほか、金属器を模倣した須恵器、墨書き器、硯、唐三彩、緑釉陶器などが出土しています。これら貴重な遺構や遺物が発見されたことから、この遺跡は「府中市指定史跡」になっています。

また、遺跡のすぐ西側には、広島県史跡に指定されている「伝吉田寺跡」があります。飛鳥時代に創建されて、平安時代まで営まれた「法起寺式」の伽藍と推定される寺院跡です。



元町東遺跡



巡方



石帶

## ドウジョウ遺跡

ドウジョウ遺跡は、元町地区を南北に流れる砂川（音無川）と金龍寺東遺跡の間に広がる奈良時代から平安時代にかけての遺跡です。

これまでの調査で、国府関連施設を取り囲むように区画していたと考えられる奈良時代の大溝が見つかっています。この区画溝は、幅約2.5mの2つの溝が東西方向に並行して掘られていました。この遺跡は、ツジ遺跡や金龍寺東遺跡に比べ、あまり調査が進んでいませんが、今後の調査によって、国府に関係する大きな発見が期待できる遺跡です。

## 市街地に広がる遺跡

昭和63年（1988）、元町地区の砂川（音無川）の西側で、都市計画街路の整備に伴い発掘調査が行われ、倉庫と考えられる平安時代の掘立柱建物跡や井戸跡などが見つかりました。柱の根元部分や井戸枠などの木材が、腐らずに当時の状態を保ったままで出土しました。また、井戸は使用を中止して埋め立てられたようですが、その土の中に完全な形の土器が多く納められていました。これは、井戸を廃棄する際に行われた儀式に関わるものと考えられます。



国府時代の土器〔土師器と須恵器〕



砂山遺跡の井戸

この他にも、市街地には国府の時代の遺跡が数多く存在しています。府川町の文化センターの建設工事に伴って、鳥居遺跡から木製の人形が出土しています。これには人の顔が描かれており、病気など身体の災いをお祓いする儀式に「呪い札」として使われたものと考えられます。

備後国府跡の発掘調査では、国府附属工房の系譜を受け継いだ鋳物に関係した遺構・遺物が多く確認されます。また、中世には府中に「国分寺助國」という刀鍛冶の一党がいたと伝わっており、近代金属工業の素地になった可能性があります。

以上のような調査成果は、国府に関係する施設が元町周辺に存在していたという状況証拠であり、これから発掘調査が進んで行くなかで次々と付け加えられていきます。そのうち、政庁などの国府の中心施設が明らかになって行くでしょう。備後国府は、府中の原点ともいべき遺跡で、解明が待たれています。



金龍寺東遺跡の板壁建物跡 [9902丁]



鬼瓦〔鳥が刻まれている〕

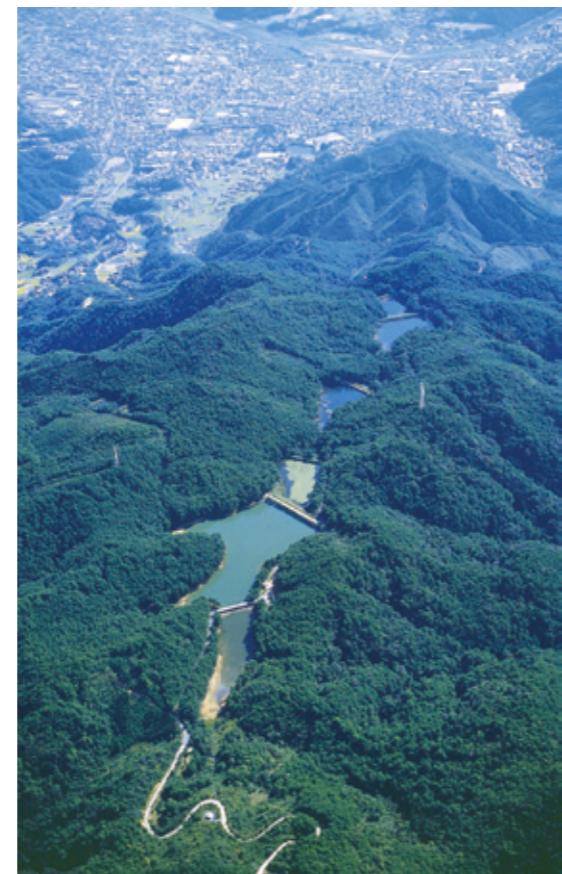


鳥居遺跡出土人形  
〔顔が描かれている〕

## 常城 一幻の古代山城

7世紀には朝鮮半島の霸権をめぐって、百濟、新羅、高句麗、唐、日本などの諸国が入り乱れ争っていました。白村江の戦い(663)で、唐と新羅の連合軍に敗れ、日本は撤退することになりますが、当時の超大国であった唐が日本へ進攻してくる事態に備え、大宰府を中心に大野城や基肄城などの山城を各地に築きました。朝鮮半島の山城築造技術を取り入れて築かれているため「朝鮮式山城」と呼ばれています。

『続日本紀』養老3年(719)の条に、「備後国安那郡の茨城、葦田郡の常城を停む」という記事があります。「常城」は、その地名から福山市新市町常および府中市本山町七ツ池周辺一帯に存在したと推定されますが、明確な遺構は見つかっていません。昭和42~43年(1967~68)に、府中高等学校の豊元国教諭と地歴部が七ツ池周辺を現地踏査し、全国的な調査例がほとんどなかった当時としては、画期的な成果をあげることができました。しかし、各地での調査が進んだ現状では、整合しない点も出ており、当時確認された遺構の大半は、今では古代山城に関係ないと考えられています。また、現在も確認調査が行われていますが、一帯には山上寺院の「青目寺」の遺構も重複して存在し、常城の確認を困難にしています。



常城推定地の七ツ池周辺

## 前原遺跡と古代山陽道

前原遺跡は、昭和10年(1935)の福塙線建設に伴う工事で、奈良時代の瓦が大量に出土したことにより発見されました。当初は寺院跡と考えられ、「父石廃寺」や「前原廃寺」となどと呼ばれていましたが、現在では「葦田駅(あしだのうまや)」と考える説が有力になっています。駅家(うまや)説は、「マエハラ」という地名が「ウマヤ」→「マヤ」→「マエ」とつながることや、大量に出土している瓦を他地域の瓦文様と比較研究した結果から推定されているものです。

駅家とは、古代の官道に沿って一定の距離ごとに置かれていた施設で、乗継ぎ用の馬が常置されており、現在の高速道路のサービスエリアにあたります。都と大宰府を結ぶ古代山陽道は最も重要な路線とされ、外国からの使節が通ることもありました。山陽道では、外国使節の宿泊所も兼ねていて迎賓館的な性格もあったため、瓦葺き・白壁・赤塗りの建物であったと伝えられています。布勢駅(ふせのうまや)に比定されている兵庫県龍野市の小犬丸遺跡では、大量の瓦のほかに、表面に白い土が付着した壁土や赤色顔料の付着した瓦が出土しています。

## 備後の山陽道

備後の山陽道は、現在の福山市神辺町、駅家町から府中市、尾道市御調町を東西に貫いていた

と考えられますが、具体的な経路や駅家推定地についてはさまざまな説があります。そのなかで推定地と駅家がほぼ一致しているのは、品治駅(ほんじのうまや)と推定されている福山市駅家町の最明寺跡遺跡(中島遺跡)です。現地では以前から瓦が大量に採集され、地表観察で基壇状の盛り上がりも確認できます。遺跡の南に隣接する最明寺跡南遺跡では、県道建設に先立って発掘調査が行われ、駅家を特徴付ける「国府系瓦」と呼ばれる文様をもつ瓦が大量に出土しました。前原遺跡で大量に出土する瓦も国府系瓦であるため、駅家跡と推定されています。

## 発掘調査の成果

前原遺跡は、平成6年(1994)から平成18年(2006)まで断続的に発掘調査が行われました。

調査の結果、奈良時代の礎石建物、掘立柱建物から礎石建物に改築された建物跡、瓦葺の築地堀跡、遺跡周囲の溝、山陽道側溝の可能性がある直線的な溝、建物跡に先行する奈良時代前半の溝などが確認され、全体は93~94m×75~76mの大規模な施設であることが明らかになりました。赤色顔料の付着した瓦を含む大量の瓦(軒平瓦、軒丸瓦、面戸瓦、鬼瓦)、「土馬」をはじめとする呪い用のミニチュア土製品、煮炊きに使う土器なども出土しました。また、遺跡内には古墳も確認されましたが、墳丘のほとんどは破壊され横穴式石室の一部が残されていました。



前原遺跡の「巨大建物」跡

掘立柱建物については、柱穴が隅丸方形の1.2m以上の大きさで、広島県内でも最大級です。建物規模は、東西方向では柱が5本で、それぞれの間隔が2.4mずつの全長9.6m、南北方向では柱が7本以上で、それぞれの間隔が3.6mずつの全長21.6m以上になります。この大きさは県内でもほとんど調査例がないほどの規模で、「巨大建物」といってもいいでしょう。また、建物は総柱という構造をとっています、「くら」(蔵、倉、庫)や居宅など床張りのものと考えられます。さらに、梁間(東西)と桁行(南北)の柱の間隔が極端に違うことも特徴です。

このような特徴をもつ大規模な建物は、野磨駅家と推定される兵庫県上郡町の落地飯坂遺跡や近江国政府(国府の中心施設)の東400mにある大津市の惣山遺跡などでも確認されており、官衛(役所)関連の特殊な建物であることはほぼ間違いないでしょう。

また、この大規模な建物は、奈良時代中頃に掘立柱から礎石建物へと建て替えられていますが、



馬をかたどった土馬

この状況は、広島県府中町の下岡田遺跡(安芸駅)や兵庫県龍野市の小犬丸遺跡(布勢駅)と同様のあり方を示しており、前原遺跡が駅家であるという仮説を補強するものです。さらに、建物に先行する奈良時代前半の溝が見つかったことで、遺跡の中心部が整備された時期の手がかりが得られました。施設を整備・造成する際に破壊された横穴式石室の埋土から奈良時代の初め頃の土器が出土したことと考え合わせると、奈良時代には遺跡周辺が広範囲(現地形から推定すると南北約200m、東西約100m)に造成され、ついで奈良時代の中頃以降に、中心部の築地や建物が整備されたと思われます。

#### 備後国府と前原遺跡

古代山陽道は、当時の国を中心とする府に近接した地域を通っていたと考えられていますが、正確な位置はわかつていません。前原遺跡を駅家と考えた場合、遺跡の西側に山陽道が通っていたと推定されますが、平野部が狭い現地形から考えると、駅家・山陽道とも立地条件が厳しいところに設置されていたことになります。府に於て、西の入口にあたる芦田駅は特に重要な地点であり、駅家や山陽道の設置にあたっては、駅間距離や通行の便だけでなく、府の存在も背景として大きく影響していたと想定されます。

#### 青目寺跡 一七つ池周辺の山上寺院-

府中市街地の北方にある亀ヶ岳山頂近くには、通称「七つ池」と呼ばれるため池群があり、市民の憩いの場として親しまれ、周辺には、青目寺跡や常城推定地など全国的にも貴重な歴史遺産が多く存在しています。青目寺は天台宗の寺院で、延喜年間(901~923)には、山上に4坊、周辺の山腹に11寺を従えるほど隆盛していましたが、たび重なる火災などによって次第に衰退しました。寛保3年(1743)には、現在地に焼失をまぬがれた仏像を移したという言い伝えがあります。仏像の製作年代は、平安時代の初め頃と推定されており、伝承を裏付けています。

青目寺跡は、古代山城の「常城」と重複していますが、各地の古代山城には後世になって山上寺院の造られている例が多く見受けられます。これは単なる偶然ではなく、建物などを造るために平坦地が確保しやすいことや、水が豊富で当時の中心地に近接しているなど、立地の共通性によるものと推定されています。また、山城に使用されていたときの登山道や通路が残され、建物用に造成していた平坦地を活用することができ、他の場所より容易に開山できたことも要因の一つと考えられます。

昭和42~43年(1967~68)にかけて、府中高等学校の豊元国教諭と地歴部が七つ池の周辺を主に地表観察によって調査し、山上寺院が全国的にほとんど調査されていなかったなかで、画期的な成果をあげることができました。その後、平成7年(1995)以降の継続的な分布・確認調査により、各地点に中御堂・北御堂・西御堂・東御堂・南御堂とよばれる建物遺構が確認されています。平安時代の初め頃の綠釉陶器や、南北朝時代の輸入青磁が出土したこと、山上の青目寺が平安時代初め頃に開基されて、南北朝時代までは伽藍が維持されていたことが確認でき、山上の寺院



前原遺跡出土瓦

と中腹にある現在の青目寺が並存していたことも明らかになりました。

また、現青目寺の石垣改修に伴って事前に調査した結果、奈良時代の瓦が見つかり、青目寺の起源がさらに遡る可能性が高くなりました。さらには、宗教面で府の機構の一部を担い、それを背景として山上に大伽藍を展開していったことも想定されます。

以下、各地点における発掘調査の成果を紹介します。

#### 中御堂地点

ツツミ池(6番池)傍らの平坦面に礎石が6か所残っており、何らかの建物があったことがうかがえました。調査の結果、礎石の抜かれた跡も数か所見つかっており、平安時代の土器が出土しました。なお、背後の谷の奥には、非常に大きな平坦地があることが確認されています。



中御堂の建物跡

#### 北御堂地点

ロノ池(7番池)からせせらぎ水路に沿って奥に入ると、右手の山腹に平坦地が1か所あり、さらに左手の奥にはたくさんの平坦地が広がっています。調査の結果、谷底に近い斜面に堆積した土層には多くの土器片が含まれており、その中には緑釉陶器もありました。遺物の年代は、平安時代前半のものが中心です。

#### 西御堂地点

大池(5番池)西側の山腹に平坦地が1か所あります。調査の結果、石敷きの通路が見つかり、礎石らしい石もいくつか残っていました。

#### 東御堂地点

中御堂から、東回りで青目寺に降りる林道を進み、峠になった地点から東の山へ数百m入ると、南側に延びる尾根筋があり、その鞍部を削平して平坦面が作られています。調査の結果、平坦面の中心には、石で周りを囲って一段高くした基壇が残っており、その内側には礎石が並んでいます。方形の御堂が建っていたと見られます。



東御堂の基壇

#### 南御堂地点

上新池(3番池)と下新池(2番池)の間の道路を挟んで、両側の山腹に数か所の平坦地群が確認されています。かつては井戸が残っていたようですが、道路工事で埋まってしまいました。調査の結果、13~14世紀頃に中国の龍泉窯で焼かれた青磁の花瓶(牡丹の花の文様が浮き彫りになっている)や小形の碗が出土しています。

また、石垣の並び方や積み方、地形の特徴などから、通路=参道と推定される部分が上方の平坦地に向かって延びている状況も認められます。

#### 現青目寺(青目寺観音堂遺跡)

「青目寺」が衰退した後、江戸時代に亡失をまぬがれた仏像を移したと伝える寺院の境内です。石垣の改修工事に際し、石垣が江戸時代の珍しい特徴をもっているものであるため、解体後に旧状を復元するような改修を行うことにしました。それに伴って、石垣内側の確認調査を実施したところ、石垣の裏込めから奈良時代と推定される平瓦片が出土しました。この瓦の発見により、青目寺が奈良時代まで遡る寺院跡である可能性が高くなりました。

#### 骨蔵器　一火葬された人々

奈良時代になると、「骨蔵器」と呼ばれる容器に火葬された遺骨を納めて葬る「火葬墓」が現れます。記録によると、日本で初めての火葬は道昭というお坊さんで、文武4年(700)のことです。これは釈迦が荼毘に付されたことに由来し、その後火葬は僧侶にとどまらず、天皇をはじめとする身分の高い人や貴族、官人(役人)などにも見られるようになりました。しかし、当初は一般の人々が火葬されることではなく、限られた人にのみ採用されていたようです。その後、京(平城京)周辺だけで行われていた火葬も、次第に日本各地で見られるようになりました。これは、大陸から伝わった佛教が「鎮護国家の思想」として地方へ広められることや、「律令制度」により中央の政治体制に組み込まれたことなどが理由としてあげられます。

広島県内では、現在まで30例余りの火葬墓が確認されていますが、府中市は特に多く見られます。伊勢地岡遺跡(本山町・府中町)、亀ヶ岳遺跡(本山町)、坊迫C遺跡(元町)、角尾山遺跡(広谷町)、ウロウギ遺跡・亀寿山遺跡(中須町)です。火葬墓の発見場所は、ほとんどが丘陵の先端部分で、府中市街地を臨める好立地と云えます。しかし、いずれの事例も骨蔵器の壺が偶然に発見されているだけで、蓋に使われた土器や埋められた素掘りの墓壙(墓穴)や石囲いなどの遺構は確認されていません。

火葬墓が府中市内に多いことについては、「備後国府」の存在を無視できません。国府では、国司だけでなく周辺の人々も佛教を信仰していたと思われ、その影響で多くの官人が火葬されていたことを想像するに難くありません。県内の火葬墓を見ても、役所跡や駅家跡・寺院跡などの近辺で確認されることが多く、律令国家や佛教との密接な関連をうかがわせています。



鎌倉時代の五層塔婆  
〔正和5年(1292)の銘〕



亀寿山遺跡の骨蔵器〔火葬人骨を収めていた〕

#### 国府の衰退

延暦13年(794)に京都の平安京に都が移され、10世紀に入るころには、朝廷が国ごとの税の徵収や土地の管理などを国司の裁量に委ねるようになり、任国を私物化する国司が現れました。そのなかで、国司の職は利権化し、朝廷や有力貴族に「志」(賄賂)を届けたり、寄付したりして国司に任命(成功)される下級貴族が出てきました。任地で実務をとる国司は「受領」とも呼ばれましたが、任命されても任地に赴かず「目代」を派遣する「遙任」国司も現れ、地方制度は形骸化していました。国によっては、国司が暴政により郡司や住民に訴えられることもありました。

その後、国衙領(荘園以外の土地)からの税などを特定の寺社や個人(後に世襲化)に与える「知行国」の制度もおこり、土地の私有化が進みました。各地の国府調査例から、この頃の政府は施設が簡略化していったことがわかります。政府に代わって、国司や目代の居館が政治の中心になったためと思われます。鎌倉時代になっても朝廷は国司を任命しましたが、武家政権(幕府)の影響力が大きくなるにつれて、次第に名ばかりのものになっていきました。

#### 武士の時代

律令制度では、土地は基本的に国家の所有でしたが、次第に「莊園」と呼ばれる私的な所有地が増えていました。莊園のほとんどは、現地で土地経営していた有力農民などが、天皇家や有力な貴族・寺社に寄進したもので、税なども免除されていました。平安時代中期以降、現地で莊園を管理する「莊官」や国府の実務を掌握していた「在庁官人」、国司の任期終了後も現地にとどまり土着化した下級貴族などは、やがて武装化して「武士」となっていきます。その一部は、天皇家や有力貴族と結びつきを深め、武士団を組織していきます。その代表が「平家」や「源氏」で、平安時代の末期には、保元・平治の乱を経て、平家が政権の中枢を占めるようになります。その平家を滅ぼした源頼朝は、鎌倉に幕府を開き武士の時代が始まります。

鎌倉時代の国府や府中の様子がわかる史料は残っていませんが、備後国府の調査では、大規模な建物が集中する地域の周辺に、平安時代末から鎌倉時代にかけて小規模な建物が密集している状況が確認されています。鎌倉時代になっても、守護が執務・居住する「守護所」などがおかれて、町が拡大をつづけ都市的な機能が維持されていたと思われます。周辺の丘陵では、伊豆迫山遺跡や坊迫遺跡でこの時代の土壙墓・木棺墓が見つかり、副葬品として「湖州鏡」という中国で製造された鏡が出土しています。また、坊迫遺跡では寺院跡も確認されています。



伊豆迫山遺跡の木棺墓(SK16)



SK16出土の湖州鏡  
〔日本で鋳造されたもの〕

### 3 国府以後の府中

#### 南北朝時代の動乱

建武3年(1336)正月、足利尊氏が京都で北畠頼家らに敗れ、西走して2月に鞆(福山市)へ到着します。そこで光厳上皇(北朝)から院宣を受けて、朝敵の名を返上したのを機に九州に下り、態勢を立て直した後に瀬戸内を東へ向かい、厳島神社や尾道・鞆を経てさらに東上し、5月末には湊川(神戸市)の合戦で勝利するなど激動の年でした。武家方有利で終結するかに見えたこの動乱も、やがて足利尊氏・直義兄弟の不和で混乱(觀応の擾乱)が続きます。直義の養子直冬(尊氏の実子)が中国探題の要職にあって、当初は鞆を本拠地にしたこともあり、備後では争いが長く続々とありました。この時代は、日本史上での大きな変換点となりました。

#### 有福城と青目寺

建武3年6月、津口荘の地頭山内觀西は、備後守護の岩松頼宥から有福城(上下町有福)に立て籠もっている竹内兼幸を討伐するよう命令を受けました。竹内兼幸は中世備後国衙(在庁という)の役人であったとおもわれ、同年9月には、青目寺の別当(寺務統轄長)弁房らとともに、山内氏を攻撃しています。岩松頼宥は足利尊氏(武家)方の有力部将、竹内兼幸・弁房は公家方(南朝)になります。竹内氏を攻撃した武家方のなかには、長谷部氏(長氏)がいました。長氏は、翁山(上下町上下)に城を構えていた豪族です。このように、備後地方でも公家方・武家方に分かれて戦闘が繰り広げられており、一族内、あるいは近隣の者同士でも争っていました。その端緒は、南朝方の桜山四郎が吉備津神社(福山市新市町)で挙兵したことですが、伝承では上下町佐倉も桜山氏ゆかりの地と云われています。

正平17年(1362)11月、安芸の豪族吉川經政が直冬を助けるために「備後国符中」に到着したという記録があります。「府中」という地名の史料上の初見です。翌12月には、符中・宮内・矢野でも戦いがありました。動乱を経て、未だ命脈を保っていた古代的な秩序の崩壊が一気に進み、府中周辺でも、「在庁」官人という古代的な権威を拠り所にしていた竹内氏、古代以来の大きな寺である青目寺、吉備津神社などが衰退することになります。青目寺の「十一面觀音像」はこの時代のものと考えられ、弁房ら僧兵がこれに合掌して戦いに赴いた姿が想像されます。

中世は、戦さや飢饉などが続き、人々が死と常に隣り合わせの時代であったせいか、仏教が庶民の間にも浸透してゆきました。府中市重要文化財に指定されている座禅堂などがある上下町善昌寺は、正中2年(1325)に当地の豪族斎藤美作守景宗が弁翁という僧侶を迎えて開かれました。



甲奴郡のほぼ中央に立地した有福城



青目寺の十一面觀音像

#### 八ツ尾城と守護山名氏

永享9年(1437)8月1日、山名満熙(持熙)は、將軍足利義教に遠ざけられていた大覺寺義昭(義教の弟)を擁して備後国府城で挙兵したものの敗れて、満熙の首級は京(平安京)へ届けられました。異母弟である山名持豊(後の宗全)が、備後などの守護を務める山名家の家督を継いだことに対して不満に思ったことが発端です。この出来事は公家たちの日記にしたためられていることから、京でも噂になった大事件だったことがうかがえます。

この「備後国府城」とは、かつて国府があった地の背後にそびえ立つ八ツ尾城(本山町・出口町)を指していると考えられます。八ツ尾城の城主については、江戸時代初め頃の書物には山名伊豆守・宮田備後守、江戸時代中頃のものには山名清氏と記されています。宮田氏は山名氏の一族で、「応仁・文明の乱」(1467~77)では、西軍の主将山名宗全に代わり八ツ尾城に入り、備後の西軍を指揮していました。八ツ尾城は守護山名氏と関わり深い城でした。

南北朝時代以降、備後守護は神辺城を拠点にしたと言われていますが、実は確実な根拠があるわけではありません。例えば、暦応元年(1338)3月に浄土真宗の著名な僧侶である存覓上人が、「備後国府の守護の面前で日蓮宗の僧と宗教論争をした」という史料があり、守護が備後国府にいたことを示しています。ここでいう備後国府とは単なる地名で、他国の例でも、武家の地方支配の拠点である守護所は、多くは国衙の近くに構えられています。

備後の守護は短期間に次々と交替していましたが、15世紀に入った頃に但馬守護山名時熙が備後守護も兼ねたことから、備後守護は山名氏が継承するようになりました。山名満熙が国府城を奪取したのは、この城が守護の城というシンボル的存在であったからと考えられます。

神辺に守護所が置かれたとすれば、その背景には、古代以来の山陽道が神辺から尾道に向かうようになり府中を通らなくなったことや、国府城の事件が原因で府中から移転したともできます。伝承によると、神辺城は嘉吉3年(1443)に再築されたということです。

なお、元町の住宅団地造成工事に先立って行われた池ノ迫遺跡の発掘調査では、砦の跡が見つかり、深い堀切がつくられました。これは国府城をめぐる戦いの時か、少し後の応仁・文明の乱の頃に築かれた可能性があります。この時代にも、武家が備後全体を支配するうえで、「府中」の掌握は大きな意味を持っていたと思われます。



市街地の背後にそびえる八ツ尾城



池ノ迫遺跡の堀切

## ちゅうせい 中世の石造物

人々は、石を加工してさまざまなものを造ってきました。中世は、石垣の普請や礎石を使った建物が増加し、仏教の普及に伴い仏塔や墓塔が大量に造られたので、石の加工技術が大いに高まった時代でした。府中市内には、県・市文化財に指定された貴重な石造物が多く見られます。

本山町の青目寺塔婆(県指定)は、正応五年(1292)の銘がある花崗岩製の五層塔です。塔(塔婆)は、もともと寺の伽藍の中心に大きな木造建築物として建てられますが、石製の塔は供養塔として造られたことが多いようです。境内の水鉢(市指定)は花崗岩で造られた八角形の鉢で、側面に蓮華文が刻まれています。天文二四年(1555)の銘があります。

青目寺西方の山中にある「伝うしの塔」(市指定)は、その形態から鎌倉時代初期にまで遡ると考えられる五輪塔で、県内最古級といわれています。青目寺の下方に鎮座する日吉神社にも、正和四年(1315)の銘が入った宝塔(県指定)があります。元町の坊迫にも、南北朝時代頃とみられる宝塔(市指定)が残されています。宝塔は残された数が少なく、珍しいものです。これらの塔はすべて墓ですが、その主は明らかになっていません。

府川町の日吉神社鳥居(市指定)は、鎌倉末から室町時代初めに創建されたと考えられ、県内最古級といえます。宝暦十年(1760)に再建したことが刻銘されています。

鵜飼町の常福寺水鉢(市指定)には、天文十一年(1542)の銘や「尾道住大工左衛門」と刻んであり、尾道石工の作製が確認できる県内最古の例です。

上下町にも貴重な石造物が残されています。矢野の安福寺には、正平十年(1355)銘の宝篋印塔(県指定)があります。「正平」は南朝年号で、正平17年には矢野で合戦があったことも史料に見えますことから、南朝方に属した地元の武士と何らかの関係が考えられます。宝篋印塔の隣りには、宝塔(市指定)も並んでいます。小塚の少林寺近くには、正長元年(1428)の銘が刻まれた宝篋印塔があります。この塔は、通称「小米石(こごめいし)」と呼ばれる結晶質石灰岩で造られ、東城町(現庄原市)から岡山県阿哲郡(現新見市)あたりで産出する石材です。製造当初は白く輝いていますが、風化とともに表面が米粒のように剥がれてしまい、銘が判読できるものは非常に珍しいです。小堀の長福寺には、天正八年(1580)銘の無縫塔(市指定)があります。無縫塔は、僧の墓塔といわれています。

石造物も文献などとともに歴史を語る貴重な資料です。府中市の石造物を改めて見ると、比較的古いものが多いということがわかります。しかし、製造に携わった尾道石工たちの活動や、小米石製品の流通経路などはよく分かっていません。



日吉神社宝塔



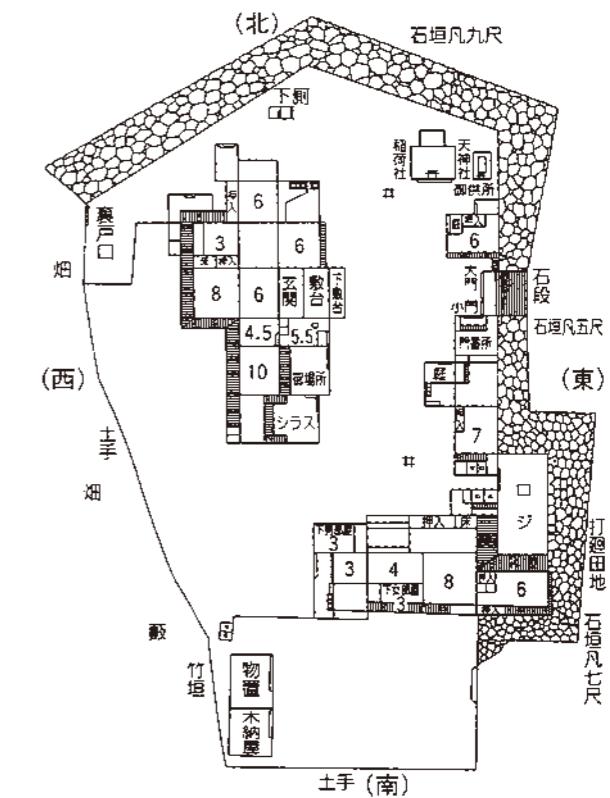
常福寺水鉢

## じょうげだい かんしょ せきしゅうかいどう 上下代官所と石州街道

### 上下陣屋(代官所)のあゆみ

関ヶ原の戦い後、福島氏が備後・安芸一円を一時的に支配しましたが、元和5年(1619)からは水野氏が福山藩10万石(備後7郡と備中の一部)を治めるようになりました。元禄11年(1698)に水野氏は5代目藩主に跡継ぎが不在のため断絶し、翌年領地が再検地された結果、旧福山藩領は15万石と算出されました。(その時の検地帳は各村に控えが保管されており、上下地区に關係するものは市重要文化財に指定されています。) 元禄13年(1700)に旧福山藩領は二分され、10万石は新福山藩領(松平氏、後に阿部氏)、5万石は幕府領となりました。上下と備中笠岡には代官が置かれ、上下代官(初代:曲淵市郎右衛門)は、安那郡・神石郡・甲奴郡の計71か村(約4万石)を管轄しました。

享保2年(1717)、備後の幕府領のうち約2万石が豊前中津藩領(奥平氏)に編入されました。それに伴い、上下代官は廃止され、大森代官(島根県大田市、石見銀山も管轄)配下の手付・手代3~4名が上下出張陣屋に派遣されて、神石郡・甲奴郡の計22か村(幕末には神石郡・甲奴郡の13か村と備中12か村)を管轄する体制に変わりました。こうした代官所・陣屋の機能を維持するためには、さまざまな諸経費をはじめ公用に関する人馬等の供出(助郷役)などが必要ですが、これらは支配下の村々の負担とされていました。



上下陣屋の図〔明治2年(1869)〕



現在の上下代官所跡

### 上下代官所跡の発掘調査

明治時代になって上下陣屋は廃止され、跡地には明治6年(1873)に学校(考按舎)が建てられ、その後も保育所や役場として利用されてきました。この間、昭和16年(1941)には「天領上下代官所跡」として、広島県史跡に指定されています。平成16年(2004)には府中市と合併し、上下支所として利用されていましたが、平成19年(2007)に支所が別の場所に移転し、解体工事されること

に先立って、遺構の残存状況を確認するために発掘調査を行いました。

明治2年(1869)の絵図などの検討から、敷地の北側では、現在の石垣の内側に代官所の時期の石垣と石段が存在していると想定していました。調査の結果、江戸時代の代官所の石垣と石段と明治時代の学校の石段と思われる痕跡を確認しました。石の積み方から見て、検出された石垣は幕末頃に築かれ、その後石段が築かれていると考えられます。さらに、学校として利用されている頃に、古い石垣の石を再利用しながら、石段の下端の位置に合わせて新しい石垣を築くと同時に敷地を拡張しています。この工事は、明治21年(1888)に寄付金800円をかけて大改築したもの可能性があります。また、現在の石垣は、昭和の初め頃築造されたものと思われます。

#### 石州街道

江戸時代になると、東海道をはじめとする五街道を幹線にして、それに接続する脇街道などが枝葉のように広がる交通網と、それに伴う宿駅制度が整備されました。大坂(大阪)から下関までは山陽道あるいは西国街道などと呼ばれ、五街道に次いで重要視されていました。山陽道が備中から備後に入つてまもなく、下御領村(神辺町下御領)から分かれた脇街道がいわゆる石州街道(銀山街道)です。ちなみに、尾道港から山陰に抜ける出雲街道(雲石街道)も、石州街道と呼ばれることがありました。当時の街道には、同じ目的地に向かう複数の経路が同じ名称で呼ばれることもあったのです。

石州街道は、幕府直轄領の大森銀山・代官所(島根県大田市)に至る道として重視され、道幅7尺(2.1m)と広く、府中市村(府中市府中町)・上下村(同上下町)・吉舎村(三次市吉舎町)には宿駅が置かれ、伝馬人足が常置されていました。吉舎宿では出雲街道と合流し、赤名峠を経た後に西に分かれて銀山街道となり、大森銀山、温泉津港へと至りました。このルートは、幕府領の年貢銀を大坂への運搬に使用したほか、大森代官所の役人などの赴任や離任、御用蜜(大蜜)の輸送、



石州街道の道標 [府中町]



上下代官所跡の石垣



中津藩(左)と福山藩(右)の藩境石

石州銀を大坂に運んだ帰路など、さまざまな公用に利用されていました。毎年秋には、この経路で「御用銀」と呼ばれる幕府運上銀と銅が大森銀山から大坂へ送られていました。それに対して、吉舎から分かれて上下村や府中市村を経由して笠岡港に至るルートも利用されたといわれています。しかし、運上銀が通ったことを示す資料は残っていません。

#### 上下宿・上下銀とまちなみ

江戸時代に商品経済が発達するなかで、府中周辺の特産品である木綿、藍、煙草などや山陰・中国山地の産物が、石州街道を通って全国に運ばれていき、宿駅のあった府中市や上下は集散地として賑わいました。また、上下の有力商人は、代官所から委託された銀を元手として金融貸付業を営んでおり、その利潤によって減少した国内の銀産出量を補う貸付融通の制度は「上下銀」と呼ばれていました。その貸付は幕府領内にとどまらず、広島藩領・福山藩領など周辺地域にも及び、明治時代以降も上下では金融業が活発に営まれていました。



上下の町並み [中央が上下キリスト教会]

このように、上下は交通や金融を中心とした商業の町として発展して、今ある町並みの原型を形づくっていました。現存する明治時代の建物としては、上下キリスト教会や旧警察署があります。前者は、元々は商家の倉庫でしたが、戦後にキリスト教会として利用されています。後者は、後年に改築されていますが、見張り櫓は往時の姿を示しています。また、上下歴史文化資料館は、文学者岡田美知代の生家を改築したものです。大正時代の建物としては、翁座があります。歌舞伎の上演が可能な劇場として設計され、芝居・映画の上演などで賑わいました。

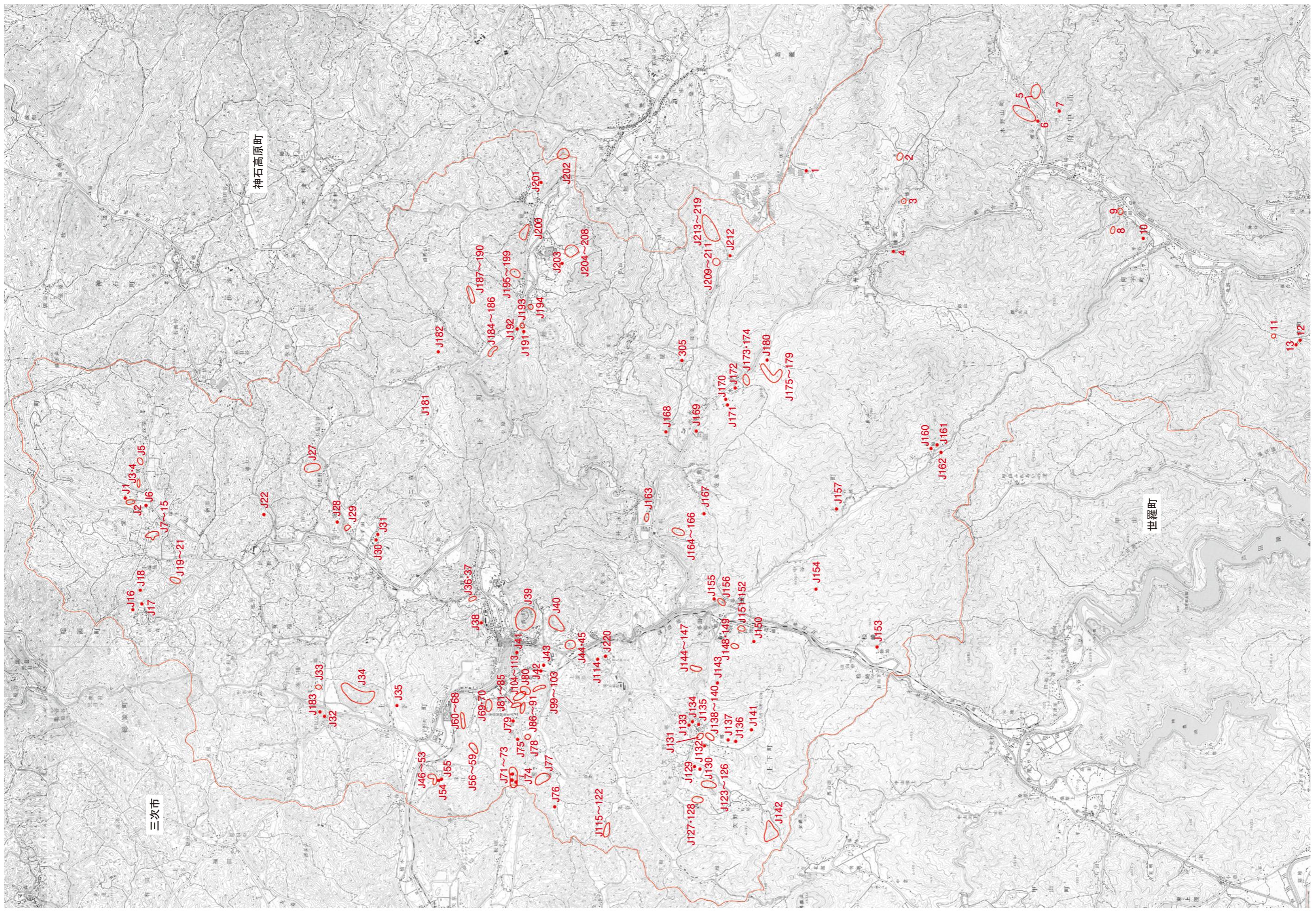
#### 洞仙焼 -江戸時代の焼き物-

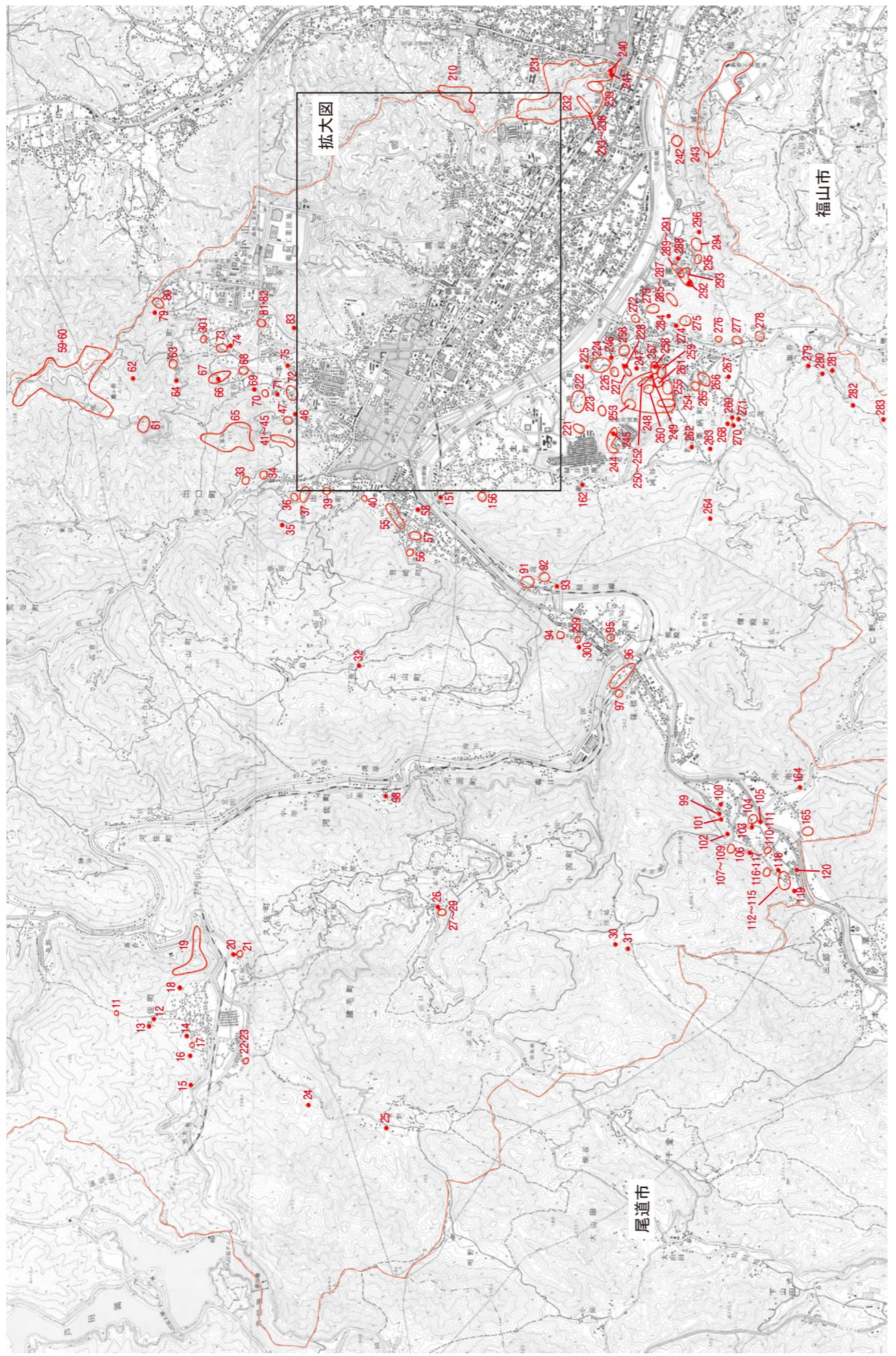
江戸時代後期の備後を代表する焼き物に「洞仙焼(洞山焼)」があります。この焼き物は、現在の出口町洞仙で焼かれ、「西備洞山」、「洞山」などの銘が入れられ、郷土の風物などが多く描かれています。いつ頃からこの地で磁器が焼かれるようになったのか正確にわかっていないが、甘南備神社(出口町)に奉納されている御神酒徳利(写真)には、前面に「奉納」、後面に「天保六(1835)未四月 宮内屋新五郎 土生屋新右衛門 九州肥後宇土郡菊助」の銘があり、この時期にはすでに窯が開かれていたことや九州の陶工が関わっていたことがわかります。

出口町に残る窯跡周辺には、現在でも窯壁の煉瓦や窯道具の破片を石垣に再利用しているのが見られます。

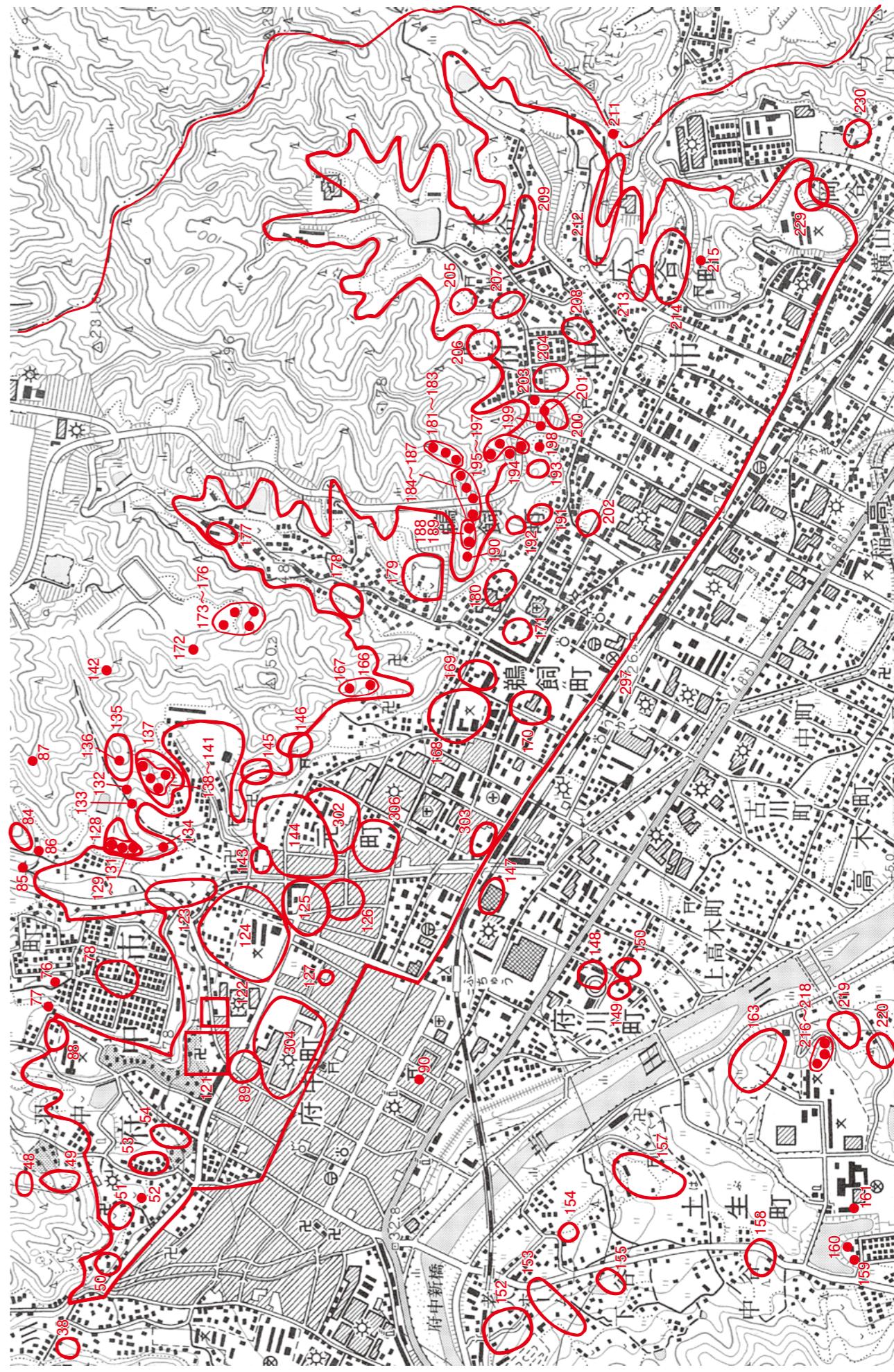


甘南備神社に奉納された御神酒徳利  
[白磁製 2口1対 高さ42cm 脇廻り21cm]





府中市遺跡地図 ( | : 50,000)



府中市街地遺跡地図 (1 : 15,000)

## 遺跡一覧

### 府中市

番号	名 称	種 別	時 代
1	諫訪谷古墳	包含地	古墳
2	医光寺谷遺跡	包含地	古代
3	行膝八幡神社遺跡	包含地	弥生・古代
4	向畠窯跡	窯跡	近世
5	小林山城跡	城跡	中世
6	古殿古墓	墳墓	中世
7	松林寺古墓	墳墓	中世
8	小谷遺跡	包含地	弥生
9	西崎遺跡	包含地	古墳・古代
10	和田古墓	墳墓	中世
11	玉禪寺古墓	墳墓	中世
12	山根古墳	古墳	古墳
13	郷空古墓	墳墓	中世
14	重信古墳	古墳	古墳
15	郷上大師堂	祭祀跡	近世
16	中間古墳	古墳	古墳
17	曾根田遺跡	包含地	弥生
18	安全寺古墓	墳墓	中世
19	橋崎城跡	城跡	中世
20	宮本古墓	墳墓	中世
21	久佐八幡神社遺跡	包含地	中世
22	権現第1号古墳	古墳	古墳
23	権現第2号古墳	古墳	古墳
24	下永野古墳	古墳	古墳
25	永野古墓	墳墓	中世
26	諸毛本郷古墓	墳墓	中世
27	諸毛本郷1号古墳	古墳	古墳
28	諸毛本郷2号古墳	古墳	古墳
29	諸毛本郷3号古墳	古墳	古墳
30	堂ヶ原古墳	古墳	古墳
31	堂ヶ原遺跡	墳墓	弥生～古墳
32	後谷遺跡	包含地	弥生
33	長者原遺跡	包含地	古代～中世？
34	二木木遺跡	包含地	中世
35	三室山盤座	祭祀跡	古代
36	甘南備神社北遺跡	包含地	不明
37	甘南備神社遺跡	包含地	弥生～中世
38	甘南備神社南遺跡	包含地	古代
39	神田耕地遺跡	包含地	弥生・中世
40	片山遺跡	包含地	弥生
41	尾立山第1号古墳	古墳	古墳
42	尾立山第2号古墳	古墳	古墳
43	尾立山第3号古墳	古墳	古墳
44	尾立山第4号古墳	古墳	古墳
45	尾立山第5号古墳	古墳	古墳
46	黒金塚古墳	古墳	古墳
47	羽中遺跡	包含地	弥生～中世
48	新宮神社北遺跡	包含地	中世？
49	羽中南遺跡	包含地	弥生・古代
50	辻高居西遺跡	官衙？	古代
51	辻高居東遺跡	集落？	弥生・古代
52	洞仙燒窯跡	窯跡	近世
53	出口新町遺跡	官衙など	古代
54	辻横田遺跡	官衙など	古墳～中世
55	鳥羽遺跡	包含地	弥生～中世
56	仲谷遺跡	包含地	中世
57	チヨコシ遺跡	包含地	弥生・古代
58	加一遺跡	包含地	中世
59	青目寺跡	寺院跡	平安～室町
60	常城跡推定地	城跡	古代
61	旗立山城跡	城跡	中世
62	亀ヶ岳遺跡	包含地	古代
63	青目寺觀音堂遺跡	寺院跡	中世～近世
64	うしの塔古墓	墳墓	平安～鎌倉
65	ハヅ尾城跡	城跡	中世
66	竹田峠古墳	古墳	古墳
67	峠の坊遺跡	包含地	不明
68	諫訪神社遺跡	包含地	古代
69	竹田古墳	古墳	古墳
70	西谷遺跡	包含地	古代～中世
71	石垣古墳	古墳	古墳
72	石垣遺跡	集落	弥生・古代
73	日吉神社遺跡	祭祀跡・他	平安～中世
74	日吉中谷古墳	古墳	古墳
75	助宗古墳	古墳	古墳
76	本山古墳	古墳	古墳
77	伊勢地岡遺跡	包含地	古代
78	伊勢地遺跡	不明	古墳・古代
79	宝泉坊古墳	古墳	古墳
80	宝泉坊遺跡	包含地	古墳～中世
81	ヒランマル第1号古墳	古墳	古墳
82	ヒランマル第2号古墳	古墳	古墳
83	松山古墳	古墳	古墳
84	門田A遺跡	墳墓	弥生・古代
85	門田第1号古墳	古墳	古墳

86	門田第2号古墳	古墳	古墳
87	中山遺跡	墳墓	弥生？
88	辻遺跡	包含地	弥生・古代
89	下才田遺跡	包含地	弥生～中世
90	横井遺跡	包含地	弥生
91	前原遺跡	官衙跡・包含地	縄文～中世
92	上原遺跡	包含地	古代
93	前原古墳	古墳	古墳
94	敷堂遺跡	包含地	縄文・弥生
95	川崎遺跡	包含地	弥生
96	法全坊遺跡	包含地	縄文～古墳
97	下川辺遺跡	包含地	縄文
98	河面谷古墓	墳墓	中世
99	番藏古墓	墳墓	中世
100	番藏第1号古墳	古墳	古墳
101	番藏第2号古墳	古墳	古墳
102	盾石遺跡	祭祀跡	弥生
103	段ヶ市古墓	墳墓	中世
104	段ヶ市遺跡	散布地	弥生
105	段ヶ市丸山古墓	墳墓	中世
106	矢谷第1号古墳	古墳	古墳
107	矢谷第2号古墳	古墳	古墳
108	矢谷第3号古墳	古墳	古墳
109	矢谷第4号古墳	古墳	古墳
110	坂本第1号古墳	古墳	古墳
111	坂本第2号古墳	古墳	古墳
112	三郎丸觀音谷第1号古墳	古墳	古墳
113	三郎丸觀音谷第2号古墳	古墳	古墳
114	三郎丸觀音谷第3号古墳	古墳	古墳
115	三郎丸觀音谷第4号古墳	古墳	古墳
116	三郎丸觀音谷第5号古墳	古墳	古墳
117	三郎丸觀音谷第6号古墳	古墳	古墳
118	土井の下古墓	墳墓	中世
119	山の神古墳	古墳	古墳
120	三郎丸古墓	墳墓	中世
121	伝吉田寺跡	寺院跡	古代
122	金龍寺東遺跡	寺院跡・官衙	古代～中世
123	門田池南遺跡	包含地	縄文～古代
124	ドウジヨウ遺跡	包含地	古代～中世
125	砂山遺跡	官衙など	古墳～中世
126	門ノ前遺跡	包含地	古代～中世
127	六地蔵遺跡	集落	中世
128	坊迫A遺跡	墳墓など	弥生～近世
129	坊迫A第1号古墳	古墳	古墳
130	坊迫A第2号古墳	古墳	古墳
131	坊迫A第3号古墳	古墳	古墳
132	坊迫B遺跡	包含層	中世
133	坊迫C遺跡	寺院跡？	古代～中世
134	坊迫宝塔	その他	中世
135	池ノ迫遺跡	墳墓・城跡	弥生・中世
136	池ノ迫第1号古墳	古墳	古墳
137	山の神遺跡群	墳墓など	弥生・中世
138	山の神第1号古墳	古墳	古墳
139	山の神第2号古墳	古墳	古墳
140	山の神第3号古墳	古墳	古墳
141	山の神第4号古墳	古墳	古墳
142	池ノ迫奥遺跡	城跡	中世
143	ホリノ河内遺跡	集落	弥生～中世
144	ツジ遺跡	官衙跡・集落跡	弥生～古代
145	潮音寺山遺跡	包含地	弥生
146	上田山遺跡	包含地	弥生
147	鳴居遺跡	包含地	古墳～古代
148	田中遺跡	集落	古代～中世
149	二宮神社遺跡	包含地	古代～中世
150	溝手遺跡	集落	中世
151	野屋の木古墳	古墳	古墳
152	野屋遺跡	包含地	弥生～古代
153	五反畑遺跡	包含地	弥生～古代
154	後開地遺跡	包含地	古代
155	柴垣遺跡	包含地	弥生～古代
156	小寺遺跡	包含地	古代～中世
157	辰山遺跡	包含地	弥生～中世
158	土井遺跡	包含地	弥生～古墳
159	巳の口山遺跡	包含地	弥生
160	巳の口山古墳	古墳	古墳
161	梶屋遺跡	包含地	弥生～古代
162	堂脇古墳	古墳	古墳
163	淵上城跡	城跡	中世
164	樋口古墳	古墳	古墳
165	河南八幡神社遺跡	包含地	弥生・中世
166	福輪塚第1号古墳	古墳	古墳
167	福輪塚第2号古墳	古墳	古墳
168	寺の西遺跡	集落など	縄文～中世
169	広畑遺跡	墳墓など	古代～中世
170	清水遺跡	包含地	古代
171	服部田遺跡	集落	弥生～中世

番号	名 称	種 別	時 代
172	東横木山B遺跡	城跡	中世
173	東横木山第1号古墳	古墳	古墳
174	東横木山第2号古墳	古墳	古墳
175	東横木山第3号古墳	古墳	古墳
176	東横木山第4号古墳	古墳	古墳
177	下塙原遺跡	包含地	弥生～古代
178	川原遺跡	包含地	弥生～古代
179	小林遺跡	包含地	

番号	名称	種別	時代
J 42	道城遺跡	集落跡	弥生～古墳
J 43	上下高校古墳	古墳	古墳
J 44	森荒神第1号古墳	古墳	古墳
J 45	森荒神第2号古墳	古墳	古墳
J 46	三須磨第1号古墳	古墳	古墳
J 47	三須磨第2号古墳	古墳	古墳
J 48	三須磨第3号古墳	古墳	古墳
J 49	三須磨第4号古墳	古墳	古墳
J 50	三須磨第5号古墳	古墳	古墳
J 51	三須磨第6号古墳	古墳	古墳
J 52	三須磨第7号古墳	古墳	古墳
J 53	三須磨第8号古墳	古墳	古墳
J 54	下谷西奥古墳	古墳	古墳
J 55	下谷岸古墳	古墳	古墳
J 56	平迫第1号古墳	古墳	古墳
J 57	平迫第2号古墳	古墳	古墳
J 58	平迫第3号古墳	古墳	古墳
J 59	平迫第4号古墳	古墳	古墳
J 60	中山第1号古墳	古墳	古墳
J 61	中山第2号古墳	古墳	古墳
J 62	中山第3号古墳	古墳	古墳
J 63	中山第4号古墳	古墳	古墳
J 64	中山第5号古墳	古墳	古墳
J 65	中山第6号古墳	古墳	古墳
J 66	中山第7号古墳	古墳	古墳
J 67	中山第8号古墳	古墳	古墳
J 68	中山第9号古墳	古墳	古墳
J 69	上高第1号古墳	古墳	古墳
J 70	上高第2号古墳	古墳	古墳
J 71	天仙平第1号古墳	古墳	古墳
J 72	天仙平第2号古墳	古墳	古墳
J 73	天仙平第3号古墳	古墳	古墳
J 74	時鳥城跡	城跡	中世
J 75	時鳥古墳	古墳	古墳
J 76	扇峰古墳	古墳	古墳
J 77	丸松城跡	城跡	中世
J 78	国留城跡	城跡	中世
J 79	上高城跡	城跡	中世
J 80	薄古山城跡	城跡	中世
J 81	薄古第1号古墳	古墳	古墳
J 82	薄古第2号古墳	古墳	古墳
J 83	薄古第3号古墳	古墳	古墳
J 84	薄古第4号古墳	古墳	古墳
J 85	薄古第5号古墳	古墳	古墳
J 86	浄円寺山第1号古墳	古墳	古墳
J 87	浄円寺山第2号古墳	古墳	古墳
J 88	浄円寺山第3号古墳	古墳	古墳
J 89	浄円寺山第4号古墳	古墳	古墳
J 90	浄円寺山第5号古墳	古墳	古墳
J 91	浄円寺山第6号古墳	古墳	古墳
J 92	浄円寺山第7号古墳※	古墳	古墳
J 93	浄円寺山第8号古墳※	古墳	古墳
J 94	浄円寺山第9号古墳※	古墳	古墳
J 95	浄円寺山第10号古墳※	古墳	古墳
J 96	浄円寺山第11号古墳※	古墳	古墳
J 97	浄円寺山第12号古墳※	古墳	古墳
J 98	浄円寺山第13号古墳※	古墳	古墳
J 99	薄古山第1号古墳	古墳	古墳
J100	薄古山第2号古墳	古墳	古墳
J101	薄古山第3号古墳	古墳	古墳
J102	薄古山第4号古墳	古墳	古墳
J103	薄古山第5号古墳	古墳	古墳
J104	薄古山第6号古墳	古墳	古墳
J105	薄古山第7号古墳	古墳	古墳
J106	薄古山第8号古墳	古墳	古墳
J107	薄古山第9号古墳	古墳	古墳
J108	薄古山第10号古墳	古墳	古墳
J109	薄古山第11号古墳	古墳	古墳
J110	薄古山第12号古墳	古墳	古墳
J111	薄古山第13号古墳	古墳	古墳
J112	薄古山第14号古墳	古墳	古墳
J113	薄古山第15号古墳	古墳	古墳
J114	大倉原遺跡	集落跡	古墳
J115	岩風呂第1号古墳	古墳	古墳
J116	岩風呂第2号古墳	古墳	古墳
J117	岩風呂第3号古墳	古墳	古墳
J118	岩風呂第4号古墳	古墳	古墳
J119	岩風呂第5号古墳	古墳	古墳
J120	岩風呂第6号古墳	古墳	古墳
J121	岩風呂第7号古墳	古墳	古墳
J122	岩風呂第8号古墳	古墳	古墳
J123	無念寺第1号古墳	古墳	古墳
J124	無念寺第2号古墳	古墳	古墳
J125	無念寺第3号古墳	古墳	古墳
J126	無念寺第4号古墳	古墳	古墳
J127	無念寺第5号古墳	古墳	古墳
J128	無念寺第6号古墳	古墳	古墳
J129	塚足遺跡	集落跡	繩文～中世
J130	小田迫遺跡	集落跡	古墳

J131	日掛城跡	城跡	中世
J132	安福寺宝鏡印塔	墓	中世
J133	下郷桑原遺跡	集落跡	弥生～古代
J134	大和遺跡A地点	集落跡	繩文～古代
J135	湯川古墳	古墳	古墳
J136	洞山第1号古墳	古墳	古墳
J137	洞山第2号古墳	古墳	古墳
J138	洞山第3号古墳	古墳	古墳
J139	洞山第4号古墳	古墳	古墳
J140	洞山第5号古墳	古墳	古墳
J141	洞山第6号古墳	古墳	古墳
J142	高鉢山城跡	城跡	中世
J143	仁和田古墳	古墳	古墳
J144	好迫第1号古墳	古墳	古墳
J145	好迫第2号古墳	古墳	古墳
J146	好迫第3号古墳	古墳	古墳
J147	好迫第4号古墳	古墳	古墳
J148	寺奥第1号古墳	古墳	古墳
J149	寺奥第2号古墳	古墳	古墳
J150	防地奥古墳	古墳	古墳
J151	防地第1号古墳	古墳	古墳
J152	防地第2号古墳	古墳	古墳
J153	堀奥古墳	古墳	古墳
J154	箱山古墳	古墳	古墳
J155	越谷古墳	古墳	古墳
J156	矢多田城跡	城跡	中世
J157	新山城跡	城跡	中世
J158	古城峠第1号古墳※	古墳	古墳
J159	古城峠第2号古墳※	古墳	古墳
J160	扇原第1号古墳	古墳	古墳
J161	扇原第2号古墳	古墳	古墳
J162	扇原遺跡	包含地	繩文
J163	井永城跡	城跡	中世
J164	山の神第1号古墳	古墳	古墳
J165	山の神第2号古墳	古墳	古墳
J166	山の神第3号古墳	古墳	古墳
J167	豆丸尻古墳	古墳	古墳
J168	末原古墳	古墳	古墳
J169	南山西古墳	古墳	古墳
J170	南山第1号古墳	古墳	古墳
J171	南山第2号古墳	古墳	古墳
J172	南山第3号古墳	古墳	古墳
J173	平山第1号古墳	古墳	古墳
J174	平山第2号古墳	古墳	古墳
J175	二反田第1号古墳	古墳	古墳
J176	二反田第2号古墳	古墳	古墳
J177	二反田第3号古墳	古墳	古墳
J178	二反田第4号古墳	古墳	古墳
J179	二反田第5号古墳	古墳	古墳
J180	平松古墳	古墳	古墳
J181	内原古墳	古墳	古墳
J182	屏風山古墳	古墳	古墳
J183	殿居古墳	古墳	古墳
J184	萩山第1号古墳	古墳	古墳
J185	萩山第2号古墳	古墳	古墳
J186	萩山第3号古墳	古墳	古墳
J187	奥の院第1号古墳	古墳	古墳
J188	奥の院第2号古墳	古墳	古墳
J189	奥の院第3号古墳	古墳	古墳
J190	奥の院第4号古墳	古墳	古墳
J191	そね第1号古墳	古墳	古墳
J192	そね第2号古墳	古墳	古墳
J193	行年遺跡	集落跡	繩文～古墳
J194	中居遺跡	包含地	弥生
J195	釈迦丸第1号古墳	古墳	古墳
J196	釈迦丸第2号古墳	古墳	古墳
J197	釈迦丸第3号古墳	古墳	古墳
J198	釈迦丸第4号古墳	古墳	古墳
J199	釈迦丸第5号古墳	古墳	古墳
J200	階見城跡	城跡	中世
J201	塔のそね古墳	古墳	古墳
J202	清滝城跡	城跡	中世
J203	中居古墳	古墳	古墳
J204	塙野田第1号古墳	古墳	古墳
J205	塙野田第2号古墳	古墳	古墳
J206	塙野田第3号古墳	古墳	古墳
J207	塙野田第4号古墳	古墳	古墳
J208	塙野田第5号古墳	古墳	古墳
J209	篠原第1号古墳	古墳	古墳
J210	篠原第2号古墳	古墳	古墳
J211	篠原第3号古墳	古墳	古墳
J212	篠原第4号古墳	古墳	古墳
J213	篠原東第1号古墳	古墳	古墳
J214	篠原東第2号古墳	古墳	古墳
J215	篠原東第3号古墳	古墳	古墳
J216	篠原東第4号古墳	古墳	古墳
J217	篠原東第5号古墳	古墳	古墳
J218	篠原東第6号古墳	古墳	